

教育心理学関係

博士論文要旨

(2006年10月～2007年9月)

ここに掲載する博士論文要旨は、1996年から自己申告によるものとなりました。

北海道大学大学院文学研究科

博士(文学) 加地 雄一

「記憶における動作と言語の相互作用—被験者実演課題と手話の記憶を中心に—」

言語的指示に従って行う動作の記憶は、被験者実演課題(SPTs)によって研究されてきた。SPTsとは、動作文(e.g. “拍手をする”)を実演して記銘する課題である。本論文は、①SPTs研究の論争点である運動構成要素の重要性について検討し、②動作が伴う他の記憶課題(書記、手話の記憶課題)において生じる現象がSPTs理論によって説明可能かを検討し、③SPTsを超えた包括的な理論を提案した。

東北大学大学院情報科学研究科

博士(情報科学) 辻 義人

「学習者の手続き的知識の獲得を促す説明活動のあり方—コンピュータ操作技能に注目して—」

コンピュータ操作の説明場面における対話に注目し、手続き的知識の獲得を促す説明のあり方について検討した。説明者と学習者の対話プロトコルより、説明者が意図的に学習者に質問を行い、思考と説明を促す場面が観察された。コンピュータ操作技能の背景要因モデルの検討結果に基づき、説明者の学習者に対する質問の効果の検討を行った。その結果、学習者の誤概念が修正され、課題に対する積極性が向上することが示された。

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士(心理学) 香川 秀太

「学内学習—臨地実習間の状況間移動に伴う看護学生の学習過程：境界横断論の観点から」

活動理論における境界横断論に基づき、学内と、臨地実習との間を行き来する中での看護学生の学習・発達過程を、質的、量的に検討した。①学習転移論と境界横断論との違いを論じつつ、後者の特徴を14のポイントに整理した。②学内から実習への過程における、思考技術的側面と、③身体技術的側面の学習過程、並びに④逆方向の、実習から学内への学習過程を分析した。最後に、⑤学習転移、境界横断論の新たな方向性を議論した。

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士(心理学) 武蔵 由佳

「大学生に対する構成的グループ・エンカウンターの手法を活用した心理教育的援助」

本研究は、構成的グループ・エンカウンター(SGE)の手法を活用して大学生の対人関係形成を促すための心理教育的援助のプログラムを作成したものである。具体的には、SGEのエクササイズの種類やメンバーの組み合わせなどのプログラムの展開の仕方を変化させた実践を行い、SGEの“構成”の規則性とその有効性について検討した。そして、そのプログラムが最終的には、大学生の心理社会的発達の促進に寄与することを明らかにした。

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

博士(人文科学) 浅野 志津子

「人はなぜ生涯学び続けるか—放送大学学生の学習動機づけと学習方略の検討—」

放送大学学生のどのような学習動機・楽しさ・学習方略が学習への積極性と継続性に影響しているのかを明らかにした。積極性に関しては特定の課題を志向する学習動機、時間を制御する学習方略、発展探究的な学習方略が影響し、継続性に関しては自己向上を志向する学習動機、知る楽しさ、発展探究的な学習方略が影響していた。面接調査も行い、動機形成のプロセス、楽しさへの学歴の影響、積極性・継続性が低い人の特徴を検討した。

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

博士(心理学) 石毛 みどり

「中学生のレジリエンシー：尺度の作成とその有効性の検証」

ストレスのある出来事への対処能力であるレジリエンシー(弾力性)の傾向を中学生対象に検討し、その概念と尺度の適応指導への有効性を示した。まず尺度を作成し信頼性と妥当性を確認した。尺度を用いレジリエンシーは人格特性因子と関連するが関連の弱い因子もある、またレジリエンシーは無気力感を直接に、間接的にはコーピングや自尊感情を介して予測し、さらに3年生の高校受験前のストレス軽減と受験後の成長感の促進に影響す

ることを示した。

#### お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

博士（人文科学） 松嶋（岸野） 麻衣

「小学校の授業における学習者アイデンティティに向けての指導一低・中学年の授業観察と教師インタビューから一」

子どもが授業で期待される振る舞い方を自覚し自分を生徒として見なせるようになることを学習者アイデンティティとし、教師の指導の特徴を低・中学年の授業観察とインタビューから検討した。教師は課題遂行や授業参加という学習活動と他者・自己理解や関係構築という人間関係とを統合して指導していた。具体的行為への指導から学級の倫理的規範の提示へという学年の特徴も見られた。子どもへの指導と表裏一体に教師の専門性の向上も生じていた。

#### お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

博士（人文科学） 翟 宇華

「中学生の学校忌避感および対人関係に関する日中比較研究」

本研究は学校忌避感を抑制する要因を中心に日本と中国の中学生の差異について検討を行ったものである。その結果、日本の中学生にとって、「友人への適応」は学校忌避感の抑制に最も強い影響を与えているが、中国の中学生の場合、友人への適応よりも、「教師への適応」が生徒たちの学校忌避感を抑制するのに最も影響力があることが見出された。さらに、不登校問題を未然に防ぐため、文化や歴史という背景も視野に入れ、学校現場で配慮すべき観点を論じた。

#### 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

博士（教育学） 中道 圭人

「幼児の演繹推論とその発達的变化」

幼児の演繹推論やそれに関連する諸要因を検討した。本研究の結果、幼児の演繹推論がさまざまな文脈によって促進されることや、その促進効果は年齢発達によって異なることが示された。また、幼児の演繹推論がワーキングメモリや抑制制御によって規定されており、その関連は発達的に変化することが示された。さらに本研究では、これらの結果や従来の研究結果を説明できるような発達のモデルを提案した。

#### 東京工業大学大学院社会理工学研究科

博士（学術） 島本 好平

「体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフス

キルに与える影響」

体育の授業におけるスポーツ経験のライフスキルへの影響に着目し、両者を多次的に評価する尺度を開発しながら、授業参加の目的意識および運動部所属の有無という個人属性をもとに、ライフスキルへの影響を検討した。また、満足感を媒介要因として考慮したモデルの検証結果からは、個人的なスキルでは媒介要因を介した影響が、対人的なスキルでは媒介要因を介さない直接的な影響が重要であることが明らかにされた。

#### 兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科

博士（学校教育学） 松浦 直己

「非行化した少年の諸特性に関する実証的研究—複数の少年院における多面的調査より—」

近年少年事件に関する関心は高まっている。しかしながら非行や逸脱行動に関する実証的研究は稀である。本学位論文では、非行のリスク因子に注目し、他領域にわたって少年院在院生に共通する因子を精査し、因子間どのような関連性が存在するのかを明らかにした。少年院在院生が有する発達的問題性、環境的逆境性はきわめて共通しており、それらの因子間には強い関連性が認められた。また少年院在院生に対して、発達的問題性を直接ターゲットにした治療的アプローチについて実践事例を示して考察した。

#### 広島国際大学大学院総合人間科学研究科

博士（臨床心理学） 清水 健司

「大学生における対人恐怖心性と自己愛傾向との関連」

対人恐怖と自己愛の関連について有効な枠組みを提示した岡野（1998）モデルに焦点を当てて、2概念の相互関係における実証可能性に言及することを目的とした。

青年期心性である対人恐怖心性と自己愛傾向を重要指標として、大学生を対象とした調査研究を行った。そして、岡野（1998）に沿った実証的モデルである対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルを作成して、導出される5類型についての詳細な検討を行った。

#### 九州大学大学院人間環境学府

博士（心理学） 高垣 マユミ

「認知的／社会的文脈による学習環境のデザインのもとの概念変化のメカニズムの解明」

科学的探究学習において、カリキュラムの特殊性・領域固有の先行概念・認知を促す学習ツール・発達段階等の「認知的文脈」と、教師の足場作り・他者とのやりとり・参加者の構造等の「社会的文脈」とを統合した学習環境をデザインした。この学習環境下で、個人内におい